

やまと 民俗への招待

鹿谷 繁

夕暮れ時に奈良の町中を歩いていると、家の奥の方から微かに鉦の音が漏れてくることがある。ゆっくり繰り返される鉦の音が、奥の仏間で念仏を唱える人の姿を想像させた。鉦の持つ硬質な響きは、さまざまなおふれた現代社会でもふと別の世界を思わせる宗教的な喚起力があるように思う。

前回紹介した六斎念仏という「詠う念仏」が、「チャンガラカン」とか「チャンカラカン」と呼ばれていたことは、太鼓を併用する場合でも人々が鉦の音で念仏を捉えていたことを示している。

大和神社の春の祭りを呼ぶのも、お渡りの時に太鼓とともに打ち鳴らす大鉦の音による。大阪府貝塚市三ツ松の明土行念仏が「チャンチャンヒキ」と呼ばれるのも、葛

城市柿本の「チンポンカンボン祭り」という呼称も、もとは法会の鉦や鼓の巧みな表現だろう。

六斎念仏といふ言ひは、15世紀半ばから歴史に登場していく。大阪府岸和田市にある久米田寺の「多治米村六斎衆」

〔文安5（1448）年〕や、五條市大津町の平田寺跡の「六斎念仏一結衆」〔長禄4（1460）年〕の名が石灯籠や宝篋印塔に残されている。

五條市畠田町には延徳2（1490）年の「六斎念仏供養板碑」（眞指定有形民俗文化財）があり、僧俗男女五十数名の名が刻まれている。また五條市西吉野町和田にも「六濟願衆二百十人」の卒塔婆型五輪塔がある。

大阪府南部から奈良県西部にかけて、この頃、六斎念仏の信仰集団の結集

が急速かつ大規模に進ん

だ。このやり方は、京都が急速かつ大規模に進ん

いたようだ。

奈良市佐紀東町の六斎念仏。左が六斎太鼓、右が鉦の奏者=1972年ごろ



鉦の響きと奈良町の六斎

奈良市佐紀東町の六斎念仏は、和歌山、奈良、大阪、京都、滋賀、福井などの府県に分布しているが、京都のように芸能的六斎にはならず、念仏中心のものだった。大安寺の集落の鉦を調べている時、寛文12（1672）年に南都の上田勝兵衛重という人が、大和の48組の六斎講に鉦を5丁ずつ寄進した旨の刻銘があった。その後、同一人物寄進の鉦が、佐紀東町などでも見つかった。また油阪村の寛文12年（1672）の「六西御念仏講帳」という文書には、奈良町の五十余りの町々の140人ほどの道俗男女の名前が記され、これとは別に二十数町に及ぶ「立念仏講」には70人ほどの名も記されていた。奈良の町中においても、詠う念仏が大きくなっている。これに人々の心を捉えていたことがよくわかる。（奈良民俗文化研究所代表）